

茶室 麟閣

福島県指定重要文化財(建造物)



tea-ceremony room Rinkaku



蒲生氏郷
(会津若松市立会津図書館所蔵)

その結果、文禄3年(1594)と推定される「少庵召出状」が出されたのです。少庵は京都に帰って千家を再興し、千家

麟閣の歴史

豊臣秀吉の奥州仕置によって天正18年(1590)蒲生氏郷が会津に入り(92万石)、近世的支配を確立していきました。
氏郷は織田信長の娘婿であり、器がおおきく勇猛な武将であるうえ、この時代を代表する文人で、特に茶道に親しみ、のち利休七哲の筆頭にあげられるほどでした。
天正19年(1591)2月28日、千利休が秀吉の怒りに触れて死を命じられた折、氏郷は利休の茶道が途絶えるのを惜しんで、その子、少庵を会津にかくまい、徳川家康とともに千家再興を秀吉に働きかけました。

その結果、文禄3年(1594)と推定される「少庵召出状」が出されたのです。少庵は京都に帰って千家を再興し、千家



千少庵
(表千家不審庵所蔵)

茶道は一子、宗旦(そうたん)に引き継がれました。そののち宗左、宗室、宗守の3人の孫によって表、裏、武者小路の三千家が興され、今日の茶道隆盛の基が築かれました。かくまわれている間、氏郷のために造つたと伝えられているのが「麟閣」であり、以来、鶴ヶ城(若松城内)で大切に使用されてきました。
しかし、戊辰戦争で会津藩が敗れ、明治のはじめ、鶴ヶ城が取り壊される際、石州流会津怡漢派の森川善兵衛(指月庵宗久)は貴重な茶室の失われるのを惜しみ、明治5年(1872)5月、自宅へ移築し、以来百二十年にわたり、森川家はその保全に努めてこられました。
会津若松市では平成2年9月12日、市制90年を記念してこの氏郷・少庵ゆかりの茶室を後世へ伝えるため、鶴ヶ城内の元の場所へ移築しました。



麟閣南側

表千家14代家元
而妙斎千宗左氏による扁額(平成2年)



表門上

裏千家15代家元
鶴雲斎千宗室氏による扁額(平成7年)



脇門上

武者小路千家14代家元
不徹斎千宗守氏による扁額(平成16年)



麟閣の扁額
茶室麟閣には、三千家の家元による扁額が掲げられています。全国的に見ても三千家の家元の扁額がある茶室は大変珍しいと言われています。

麟閣でたのしむお抹茶



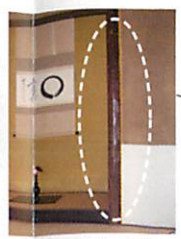
茶室麟閣では、少庵を偲びながらのお抹茶もお楽しみ頂けます。

一席: 600円(お菓子付)

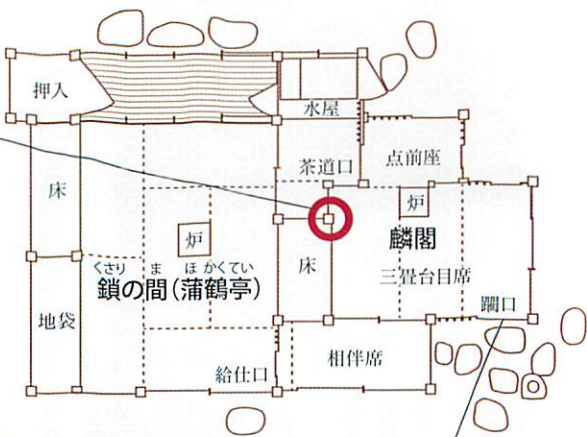
一般財団法人 会津若松観光ビューロー

〒965-0873 福島県会津若松市追手町1-1
TEL 0242-27-4005 FAX 0242-27-4012
<http://www.tsurugajo.com>





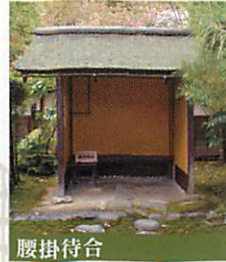
千少庵みずから削ったと伝えられる赤松の床柱。



躰口
茶室特有の客の出入口です。頭を下げ、体を縮めないで入れない小さな入口とすることで、平等の精神をあらわしています。



躰躰
客は手水鉢で手を洗い、口をすすいで席に入ります。この手水鉢は鶴ヶ城の遺構を活かしたものです。



腰掛待合
客が露地入りして亭主の迎えを待ったり、中立ちの際に一旦露地に出て、後の席入りの合図を待つ場所。

茶室麟閣

「麟閣」は、千利休の子・千少庵が建てたと言われる茶室で、蒲生時代の創建の伝承をもち、武家茶道の様式を備えた茶室として珍しい建物です。
 明治7年に若松城解体の際、城下に移築され保存されていましたが、平成2年に元の場所である鶴ヶ城内に移築復元されました。
 庭園を眺めながらお茶を楽しむことができ、定期的に茶会も開かれています。

寄付

茶会に先立って客が連客と待ち合わせたり、身支度を整えて、席入りの準備をするための場所。

